

Y5-22

感染性心内膜炎による急性腎炎症候群の一例

福井赤十字病院 腎臓泌尿器科

石川 俊介、藤田 真文、山内 寛喜、
高田 昌幸、三好 満、河野 眞範、
伊藤 正典、小松 和人、塚原 健治

【症例紹介】58歳男性。2011年1月頃から発熱浮腫持続あり、4月中旬に近医受診し検尿異常、腎不全を指摘され、当院腎臓泌尿器科入院。入院時、肉眼的血尿あり、BUN86.2mg/dl, Cr5.3mg/dlと腎機能低下の進行、CRP上昇、低補体血症を認めた。原因疾患検索のため、入院2日目に腎生検施行。入院3日目の心エコーにて僧房弁逸脱（高度MR）と、前尖と後尖の一部に大きなvegetation（12×24mm）を認め、感染性心内膜炎（IE）と診断。同日、他院心臓血管外科に転院、緊急僧房弁置換術（SJM弁）施行された。血液培養にてStreptococcus parasanguisが検出。腎生検所見では光顕で管内増殖性腎炎を示し、蛍光抗体法では係蹄壁中心にIgG・C3の顆粒状沈着を認め、IEに続発した急性糸球体腎炎と診断した。その後、抗生剤投与により、腎機能の改善傾向を示している。

【考案】本例は、急性腎不全にて発症し、その原因がIEによる敗血症と同等しえた急性腎不全の一例である。原因疾患としてIEを含めた感染症の存在を疑うことが重要と思われ、経過を呈示し、考察を加え発表する。

Y6-01

東日本大震災復興支援 ～病理医に何ができるか？～

高知赤十字病院 病理診断科部

黒田 直人、和田有加里、井上 香、
小原 昌彦、水野 圭子

このたび東日本大震災で被災された方々に心より御見舞いを申し上げます。

【はじめに】東日本大震災で被災された地域・方々への復興支援のために、病理医として何ができるのかを考える機会があり、今回当院の病理診断科部で取り組んでいるチャリティ事業（現在進行中）を報告する。

【事業の動機】1）演者は1995年の阪神大震災で被災し、住居が全壊し、10か月間、住まいのない生活をし、何等かの形で今回の東日本大震災で被災された方々に支援をしたいと考えたこと、2）日赤内では災害医療にて医師としての派遣を要求されるところがあるが、病理医は臨床医師としての期待される要望に応えられるところが乏しいために、日々無力感を感じているがゆえに、別の支援の形を模索していたこと、3）海外の友人から自国の大変な時期に何をしているだ、と背中を押されたこと、などである。

【事業の内容】国内（京都、大阪）および国外（ラトビア、チェコ、メキシコ、アメリカ）の腎腫瘍を専門とする病理医および細胞検査士に呼びかけ、腎腫瘍の稀な組織型のスライドセットを作成し、同時にその解説書を作成し、日本病理学会中国四国支部会の後援を受け、支部会内部でこの教育スライドセットを若い病理医の先生方を中心に購入していただく予定で、収益金は日本赤十字社を通じてすべて被災者のために義援金にする予定である。

【事業の目標】今回の事業で100万円の義援金を集めることを目標に取り組んでいるが、発表の際にこの結果について御報告したい。